

「エグネのある暮らし」をみつめる体験型環境学習プログラムの開発 2. 持続可能な地域づくりに資する2つのプログラム

平吹喜彦*・福田明子**

Farmstead Groves and Traditional Lifestyle. 2. Two Environmental Educational Programs toward the Establishment of Sustainable Communities

Yoshihiko HIRABUKI and Akiko FUKUDA

要旨：岩手県の胆沢扇状地には、わが国を代表する散居型農村が広がり、個々の農家には「エグネ（居久根）」と呼ばれる伝統的な屋敷林が付随している。そこには、長い時間をかけて集積されてきた(1)地域の自然と調和し、自給自足と資源の循環を大切にする生活の知恵や技法、そして(2)郷土種・極相種の豊富さに象徴される生物多様性が内在する。本稿では、この2点に着目して開発した、「持続可能な地域づくり」に資する2つの体験型環境学習プログラムを報告する。

キーワード：伝統的な暮らし、エグネ（居久根）、持続可能な地域、体験型環境学習プログラム

1. はじめに

地球環境の悪化が多岐にわたり、個々の問題が深刻さ、複雑さを増すにつれ、環境学習の役割がいつそう重要なものとみなされるようになってきた。わが国においても、2004年に「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」が施行され、世代や職業といった立場の違いを超えた人々の協働による取り組みがいよいよ活発化している。

ところで、「Think globally, act locally」という著名な標語が指摘するように、環境学習を適切に推進するための原則のひとつとして、「学習者の日常をとりまく自然・社会・文化環境と自己とのかかわりについて、体験的・探求的活動を通して認知し、分析・考察を深めた上で、良好な地域・地球づくりにむけて行動する」というスキームが提唱されている（例えば、文部省, 1991, 1992; 奥井, 1998; (社)日本環境教育フォーラム, 2000; (財)日本生態系協会, 2001)。こ

こで注目したいのは、(1)環境学習の到達点は、地球市民としての自己の形成、および安定した生活・生命の存続が可能な地域の形成をめざす学際的、自発的、永続的な学びと行動にあり、(2)その主たるフィールドおよび立脚する視点は、常に学習者自身が日常生活を営む地域である、とする思想が感じられることである（平吹ほか, 2006）。ともすれば「とらえどころがなく、アプローチも難しい」、「達成感が得づらい。」と評される環境学習ではあるが、その真価を問うためには、総合的・長期的指針を明確にした上で、地域をみつめる活動をさらに深化させる必要がある。

私たちは、環境学習の到達点や進め方をこのようにとらえた上で、岩手県胆沢扇状地に散在する農家に認められるエグネ¹⁾と伝統的な暮らしに着目して、その教育資源としての有用性を検討しながら、体験型環境学習プログラムの開発を試みた。本稿では、前報（平吹・福田, 2006）で報告した開発プロセスに沿って作

*東北学院大学 教養学部 地域構想学科, **宮城教育大学 教育学部 生涯教育総合課程 自然環境専攻

¹⁾ 胆沢地域で用いられている屋敷林の呼称で、本稿ではこのエグネを「居住空間に近接もしくは取り込まれて存在し、屋敷の一部を構成する、日常生活とかかわりの深い樹木群」とみなした。なお、胆沢扇状地の大半を所轄していた胆沢町は、2006年2月、近隣の水沢市や衣川村などと合併して奥州市胆沢区となった。

成した2つのプログラムを提示する。近年、「持続可能な地域づくり」を推進するための拠り所のひとつとして、環境教育に対して大きな期待が寄せられているが、本稿で示した体験型環境学習プログラムは、その実践記録であり、具体的提案である。

2. 地域の概要

胆沢地域の自然環境、開拓・土地利用の変遷、エグネの構造や機能、環境教育・自然教育活動といった地域特性に関しては、中川ほか(1963)や池田(1966, 1972)、斎藤(1978)、水沢市史編纂委員会(1978)、胆沢町史刊行会(1985)、岡村(1991)、三浦・五嶋(2002)、三浦・竹原(2002)、福岡ほか(2003)、平吹ほか(2005)、平吹・福田(2006)などによる報告がある。また、本研究でもっとも重要なフィールドとなった小山地区のA氏宅に関しては、平吹・福田(2006)が見取り図を示して、屋敷構えやエグネと結びついた伝統的な暮らしについて、調査結果を概説している。

3. 環境学習プログラムの開発プロセス

前報(平吹・福田, 2006)で述べたように、本研究で開発した「エグネのある暮らし」をみつめる体験型環境学習プログラムは、児童・生徒を含む市民を対象とする「エグネとエコな暮らし探検隊」と「地域遺産‘エグネ’の未来を考え隊」の2つである。それぞれは、(1) 関連する学術情報の収集・分析、(2) 試行的学習プログラムの立案・実施準備、(3) 試行的学習プログラムの実施、(4) 試行的学習プログラムの改善という4段階のプロセスを経て作成された。

4. 「エグネのある暮らし」をみつめる2つの体験型環境学習プログラム

開発した2つの体験型環境学習プログラム(付表1・2)について、ねらいや学習活動の流れを、以下に概説する。なお、本稿で示した学習プログラムに付随するワークシートは、インターネット上で公開した(<http://www.nature-voice.net/>)。

1) 「エグネとエコな暮らし探検隊」

重点的な基礎調査を行ったA氏宅で、2004年7月24日に試行的に実施した学習活動をベースとした学

習プログラムである(付表1)。

このプログラムでは、(1) エグネがはぐくむ多様な動植物、(2) 日常生活とエグネのかかわり、(3) 水の利活用の3つの視点を重視することとし、そのために「Aさんのお宅をのぞむ」、「エグネの内部探検」、「エグネのある暮らし」についてお話を聞こう(その1)、「竹を使ってネイチャークラフト」、「水のゆくえを追いかけよう」と題する5つのアクティビティを盛り込んだ。およそ4時間をかけてA氏宅の屋敷構えやエグネをじっくりと観察しながら、(1) さまざまな由来・機能を有する植物から構成されるエグネの実態、および資源循環型の暮らしの様子を自ら発掘・記録すること、(2) ヒトと自然が共生する生活やエグネの保全価値について考察し、所有者を含めた参加者全員で探求成果を分かち合うことがねらいである。

なお、アクティビティの進行にあたっては、参加者の年齢やかかわり合い(親子、夫婦、友人など)、日常の生活環境(都市か、農村か)、興味・関心などを考慮しながら、(1) 五感や感性を多用して、気づきを誘発する活動、(2) 地域の自然や風土に親しみ、楽しさやマナーを実感できる活動となるよう心がけたい。また、活動を支援するために、ワークシートや「お屋敷見取り図」大判ポスターを準備することも有効である。昼食時にも、地元の農家が経営する産直市場・食堂に協力を依頼するなどして、郷土料理と取りたての野菜・果物をいただく企画も盛り込んでみたい。

学習を稔り多いものとするためには、(1) (他地域からの)参加者とコミュニケーションを図りながら、機能性・文化性に富んだ伝統的生活様式を自らていねいに発掘し、記録すること、そして(2)所有者との対話の中で、その発見に対する確証を得て満足したり、あるいは予想を超える先人の知恵や技法を知って圧倒されるといった場面に出会うこと——これら2つの体験を保障することが肝要と思われる。そのためには、事前に実施するフィールドの視察、アクティビティの対象する事物の精選、所有者・活動支援者との打ち合わせ、そして実施中の参加者の態様に応じたプログラム進行が大切となる。

2) 「地域遺産‘エグネ’の未来を考え隊」

A氏宅をじっくり観察するだけでなく、(1) 胆沢扇

状地全体でエグネや伝統的な暮らしの状況を見渡す活動、(2) エグネを護り、後世に伝えるための手法を考えるディスカッションを組み込んだ試行的な学習活動(2004年10月30日実施)をベースとした学習プログラムである(付表2)。

このプログラムでは、「都市に住むよそ者」と「エグネと暮らす地元民」が一緒になって散居景観やエグネを観察し、「エグネの地域遺産たる価値とは何か。」「エグネを将来にわたって存続させてゆくためには、どういった行動が必要なのか。」、それぞれの立場から意見を述べ合い、相互理解を深めるという営みを大切にしたい。「都市に住むよそ者」には、ふるさとの田園景観とそのシンボルとしてのエグネを存続してゆくことの困難さや、自らの消費行動・生活様式がそのことと密接に関係していることに対する認識を、一方「エグネと暮らす地元民」には、日常生活の範疇にあるごくありふれた景観や事象が、実は時代の要請に応え得る、貴重な知恵と技法の集積する遺産であるという気づきを、それぞれ提供することが第一の目標である。

そのために「散居景観をのぞむ」、「屋敷林の博物館」胆沢扇状地をめぐる、「エグネの内部を観察しよう」、「エグネのある暮らし」についてお話を聞こう(その2)、「エグネの未来を考えるディスカッション」と題する5つのアクティビティを盛り込んだ。所用時間は、胆沢扇状地を眺望するために見分森展望台を訪ねたり、扇状地内を大きく巡回することから、昼食を含めておよそ5.5時間となった。

野外体験を主とする4つのアクティビティ、および昼食(産直市場・食堂を訪問し、郷土料理の「すいとん」を食べる)では、前述の学習プログラムと同様、(1) 五感や感性を多用して、気づきを誘発する活動、(2) 地域の自然や風土に親しみ、楽しさやマナーを実感できる活動となるよう配慮しながらも、(3) ディスカッションに向けて、日常生活と対比させながら個人が課題を発見し、考察を掘り下げてゆけるような支援を心がけるようにしたい。

すでに述べたように、この学習プログラムの大きな特徴は、(1) 導入段階で高所から地域景観を見渡し、土地利用やエグネの配置(地表に現れた模様)と地形(地表の凹凸や水系、方位)とのかかわりを分析・把

握する活動の存在、および(2) いわゆる「地元学」(里地ネットワーク, <http://satochi.net/>, 2006年12月閲覧)で提案されている、「よそ者」と「地元民」が小グループを形成して遂行する共同調査にある。進行役や活動支援者にとっては、(1) 活動の対象や視点が「地域全体から農家屋敷、エグネ、暮らし、そして地域全体」と移動することによって、個々の参加者が調査課題や論点を見失わないよう配慮すること、(2) 「エグネと暮らす地元民」から上手に地域の問題を引き出し、「都市に住むよそ者」との間でコミュニケーションが促進される状況をさり気なく創出することが肝要となる。

5. まとめ

本稿では、(1) 学術情報や環境学習活動のていねいな洗い出しと自前の景観生態学的調査による地域特性の把握、および(2) 試行的な学習活動の実施による体験学習遂行上の諸課題の把握を重視して開発した体験型環境学習プログラム、「エグネとエコな暮らし探検隊」と「地域遺産「エグネ」の未来を考え隊」について報告した。「屋敷林の博物館」(三浦・五嶋, 2002)と形容される胆沢扇状地で、エグネの多様性や由来、機能、現状を市民、特にエグネの身近に暮らす地元の方々に伝え、エグネに集積されてきた暮らしの知恵や技法、そして遺存的に存在する郷土種や極相種を再評価するための学習活動を立ち上げることは、「持続可能な地域づくり」を進めるための有効な手立てと考えられる。今回開発した2つのプログラムは、そのための最初の提案である。

「エグネのある暮らし」とは、自給自足と資源循環を基本とする、地域の自然に順応した生き方の実践であり、食料や日用品、資本のグローバルな流通に裏打ちされた現在の暮らしとは明らかに異なる生活様式であるかのように見える(水沢市史編纂委員会, 1978; 胆沢町史刊行会, 1985; 平吹ほか, 2005; 平吹・福田, 2006)。かつての「エグネのある暮らし」をそのまま現代に持ち込むことは難しいとしても、地域自然の特性や許容力を見極めた上で、自然の恵みを日常生活に上手に取り入れ、そして循環させるという仕組みこそ、いま構築が求められている持続可能な地域の基本システムに他ならない。

そのエグネが変質し、衰退の危機に瀕していることは、前報（平吹・福田, 2006）で述べた通りである。エグネを保全し、活用してゆくためには、地域の住民と行政がエグネを地域遺産として認識し、一体となった取り組みを進めることが有効である。地域外から研究のために訪れ、地域と関わりを持つに至った「よそ者」としての私たちの最初の役割は、研究成果を地域に還元し、「エグネのある暮らし」の価値を再認識してもらうための「気づき」を提供することであろう。こうした活動が糸口となって、地域の住民と行政の協働による取り組みが促進されるようになれば、次に私たちは「よそ者サポーター」としてその活動に合流し、さらなる学術情報の提供、広報や種々のイベントの支援といった役割を分担させていただけるかもしれない。旧胆沢町には環境学習にかかわる市民団体や展示施設、エグネの保全にかかわる行政の取り組みが既に存在し、「エグネのある暮らし」をみつめる活動を展開し得る素地は整っている（平吹・福田, 2006）。今後、郷土の自然や伝統的な暮らしに精通した年配の方々や、次世代を担う青少年を結ぶ架け橋として、地域遺産としてのエグネが大きな役割を果たすであろうことを期待したい。

ところで、「エグネ（居久根）」とは、岩手県の胆沢扇状地一帯で用いられている屋敷林の呼称であった（水沢市史編纂委員会, 1978; 胆沢町史刊行会, 1985）。本稿および前報（平吹・福田, 2006）では、研究事例としたこのエグネに限定して記述を進めてきたが、屋敷林自体は日本の平野や台地に広く認められ、各地域の田園景観や風土を構成する重要な要素とみなされてきた（岩崎, 1990; 青山ほか, 2000）。つまり、機能面では共通性を有しながら、地域それぞれの自然環境や文化、歴史を背景として、屋敷林を構成する植物種、屋敷林のデザインや管理手法には顕著な固有性が認められるのである（例えば、岩崎, 1990; 砺波散村地域研究所, 2001; 三浦・五嶋, 2002; 三浦・竹原, 2002）。そして最近では、社会情勢の激変に伴う維持・管理の難しさが災いして、屋敷林の荒廃あるいは自然回帰、伐採・消滅といった状況が、地域間に共通する課題としてクローズアップされている。本研究で提示した体験型環境学習プログラムやその開発プロセスが、屋敷

林の教育的価値の掘り起こしと地域に根ざした環境学習の進展、そして「エグネのある暮らし」の現代的再興、「持続可能な地域づくり」への一助となれば幸いである。

謝 辞

環境学習プログラムの開発を進めるにあたり、東北福祉大学総合福祉学部の三浦修先生、岩手大学人文社会科学部の竹原明秀先生、宮城教育大学の福岡公平、畷知智美、林出美菜、佐藤麻衣子、長谷川巧、中條裕、菊池彰人、石山香苗、遠藤陽子、岩手大学の村田野人の皆さまには、有益なご助言とご支援をいただいた。Aさんご家族には、基礎調査および体験学習のフィールドとして、お住まいを快く開放下さるとともに、貴重なお話をご提示いただいた。特定非営利活動法人エコ・スタディいさわ、旧胆沢町役場、緑を守り育てる宮城県連絡会議、そして旧胆沢町の皆さまには、折に触れあたたかいご支援を賜った。皆さまに、心から感謝申し上げます。本研究は、文部科学省科学研究費補助金(15510020, 18650236)の助成を受けて実施された。

なお本稿は、福田が主体となって実施した景観生態学的な調査と環境教育にかかわる諸活動、そしてその成果をまとめた卒業論文に基づいて作成された。

引用文献

- 青山高義・小川肇・岡秀一・梅本亮（編）, 2000. 『日本の気候景観 一風と樹 風と集落一』. 181pp. 古今書院.
- 福岡公平・平吹喜彦・荒木祐二, 2003. 岩手県胆沢扇状地の散居型農村生態系を構成する孤立林の植生. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 5: 29-38.
- 平吹喜彦・千葉聖子・福岡公平・申谷雄太, 2005. 岩手県胆沢町小山エリアにおける屋敷林の歴史的変遷. 宮城教育大学紀要, 39: 133-141.
- 平吹喜彦・福田明子, 2006. 「エグネのある暮らし」をみつめる体験型環境学習プログラムの開発. 1. 地域特性と試行的な学習活動を重視した開発プロセス. 宮城教育大学環境教育研究紀要, 9: 49-56.
- 平吹喜彦・中條裕・林出美菜, 2006. 国立花山少年自然の家で「里山の森と人の暮らしのむすびつき」を

- 学ぶ：景観生態学の視点を導入した体験型環境学習プログラムの開発．宮城教育大学環境教育研究紀要, 8:51-60.
- 池田雅美, 1966. 胆沢扇状地における開発過程の歴史地理的研究．人文地理, 18(1):1-20.
- 池田雅美, 1972. 胆沢扇状地の集落と散村景の変貌．東北地理, 24(2):91-98.
- 岩崎真幸, 1990. 「屋敷林」の諸問題－福島県相馬地方の事例を通して－. 『歴史と民俗6』(神奈川大学日本常民文化研究所編), 134-168. 平凡社.
- 胆沢町史刊行会(編), 1985. 『胆沢町史8 民俗編1』. 766pp. 胆沢町.
- 三浦修・五嶋志津子, 2002. 岩手県胆沢川流域のキツマ．岩手大学文化論叢, 5:13-23.
- 三浦修・竹原明秀, 2002. 農村景観における屋敷林研究の意義．植生情報, 6:15-21.
- 水沢市史編纂委員会(編), 1978. 住．『水沢市史6 民俗』, 134-338. 水沢市.
- 文部省, 1991. 環境教育指導資料 中学校・高等学校編. 121pp. 大蔵省印刷局.
- 文部省, 1992. 環境教育指導資料 小学校編. 119pp. 大蔵省印刷局.
- 中川久夫・岩井淳一・大池昭二・小野寺伸吾・森由紀子・木下尚・竹内貞子・石田琢二, 1963. 北上川中流沿岸の第四系および地形：北上川流域の第四紀地史(2). 地質学雑誌, 69:219-227.
- 岡村光展, 1991. 胆沢扇状地における近世の散居集落－近世初頭における村構成と家系の復原的研究を中心にして－. 人文地理, 43(4):1-23.
- 奥井智久(編), 1998. 地球規模の環境教育 環境教育最前線 学校変革実践シリーズ 第6巻. 269pp. ぎょうせい.
- 斎藤享治, 1978. 岩手県胆沢川流域における段丘形成．地理学評論, 51(12):852-863.
- (社)日本環境教育フォーラム(編), 2000. 日本型環境教育の提案 改訂新版. 414pp. 小学館.
- 砺波散村地域研究所, 2001. 砺波平野の散村. 55pp. 砺波市.
- (財)日本生態系協会(編), 2001. 環境教育がわかる事典 世界のうごき・日本のうごき. 429pp. 柏書房.

付表1. 体験型環境学習プログラム「エグネとエコな暮らし探検隊」.

学習の段階 経過時間	参加者の学習活動	進行役・支援者の留意点
a) 集合・アイス ブレイク	1) 集合(最寄りの地区公民館駐車場). グループごとに, 人員, 個々人の体調や服装, 持ち物を確認し合い, 支援者(参加者の活動を見守り, 推進するスタッフ)と交流を深める. 必要に応じて, 傷害保険料金を支払う. 2) 安全で快適な活動となるよう, 飲料, 帽子, タオル, 携帯式蚊取り器(防虫スプレーより効果大)の携行を念入りに確認する.	<ul style="list-style-type: none"> ・参加者と目線をそろえる. ・参加者に, ネームプレートやワークシートなどを配布しながら, 身支度とトイレ使用の要否を確認. ・交流を深めながら, ひとり一人の活動への思いを把握する. ・状況に応じて, 緊張を解きほぐすためのパフォーマンスを加える.
b) 導入の段階 0～ 15分	1) 全員で, 始まりのあいさつ. 氏名や所属, 参加理由などを紹介し合う. 2) ワークシートで活動全体の流れを確認し, 活動目的を鮮明にする. さらに, ワークシート中の農家屋敷(A氏宅)見取り図を用いた説明を受け, 探求のイメージを膨らませ, 活動意欲を高める. 3) 安全確保(服装や防虫対策など), 自然保護(採集や歩行時の踏みつけに対する注意など), 活動マナー(私有地や耕作地に対する配慮など)に関する留意点を確認する.	
c) 探求の段階 15～225分	1) 田園の小径を歩みながら周囲を見渡し, 散居集落とエグネの実態に関心を向ける. 2) 典型的な農家屋敷・A氏宅を正面方向からのぞみ, 全体を俯瞰するアクティビティをワークシートを用いながら実施する. 「Aさんのお宅をのぞむ」: 支援者の問いかけに応じながら, 家屋とエグネの配置・外観, 屋敷内の土地利用のあらましをつかむ. 続いて, エグネの広がりや方位, 地盤の高低, 家屋との位置関係, 樹木の種類(あるいは生育形)や樹高などと関連づけて把握する. 3) A氏宅の屋敷内を訪ね, あいさつ後, ①エグネがはぐくむ多様な動植物, ②日常生活とエグネのかかわり, ③水の利活用に関する学習を深める. そのための探求活動として, 以下の4つのアクティビティを, ワークシートを用いながら実施する. 「エグネの内部探検」: 屋敷内の土地利用や家屋の配置・役割をもう一度確認しながら, 北西部を占めるエグネに赴いて, モウソウチク林, 母屋に接する林縁に集中する山菜, 祠とそれを囲むモミや照葉樹, 土壁に沿って並ぶスギやサワラの大木, ひときわ大きいブナやケヤキの巨木, 森のように広いスギ植林などを巡る. その過程で, 植物の生態的特徴(寿命, 天然分布エリア, 成長・繁殖様式など)や由来(自生か, 植栽か), 用途などについて説明を聞き, また自ら胸高直径を測定したり, 手触りやにおい, 味を確かめる. 遭遇した動物(特に, 野鳥)も観察・記録する. 探検後に全員で, 発見したことを「お屋敷見取り図」大判ポスター上に記入するなどしながら発表し, 探求の成果を分かち合う. 「エグネのある暮らし」についてお話を聞こう(その1): 母屋にお邪魔して, 居住者の方々と交えて昼食をとる. 郷土料理や取れたての野菜・果物を食べながら, 「エグネの内部探検」を通して抱いた疑問を自由に出し合い, エグネと伝統的な暮らし(食料や燃料, 肥料などの自給自足と循環的な利用を重視した生活様式)のかかわり, エグネの管理方法などについて, お話をうかがう. 「竹を使ってネイチャーラフト」: モウソウチクを活用する一例として, 竹林から桿を切り出し, 日常生活で用いる器具を自由に作成する(時間に余裕があれば午前中に実施して, 作品を昼食時の食器として用いることもできる). 「水のゆくえを追いかけよう」: エグネ内部を横断する水路, 門前や庭園の池を思い起こして, 暮らしと水のかかわりについて関心呼び起こす. 屋敷に流れ込む水を上流に遡るグループと, 屋敷内で水のゆくえを追跡するグループに分かれて活動し, 用水を地盤の高い場所に導く工夫や, 屋敷内に流水を巡らしながら多目的に利用していた先人の知恵に気づ	<ul style="list-style-type: none"> ・まずは, 景観という枠組みの中で農家屋敷・エグネの配置を認識できるように, 問いかけを工夫する. ・ワークシートや器具類の使い方について, 個々のアクティビティごとに丁寧に指導する. ・活動当初は, 支援者が積極的に気づきを誘発したとしても, 徐々に参加者の自主的な活動へと移行させる. ・活動範囲に留意し, 安全確保やマナー遵守に心がける. 適宜休憩(水分補給の機会)を設ける. ・五感を多用した活動とする. ・動植物の形態や生態, 資源循環型の暮らしの実態にも目が向くような問いかけを配置する. ・個々の探求活動が記録として残るように, 個性を尊重しながら, ワークシートの利用を促す. ・発言が出ない場合は, 支援者が参加者の積極性を引き出すような支援を行う. ・危険を伴う伐採は, 事前に終えておくことも検討する. ・クラフトの時間は, 工具の取り扱いを注視し, 事故を防止する. ・掘削した用水路を用いて, 扇頂部から遙々導いてきた水を, 庭園を飾る池への給水, 庭木や野菜への散水, 野菜や農具の洗浄, 水田の灌漑に順次活用し

<p>d) まとめ段階 225～240分</p>	<p>く。探検後に全員で、発見したことを「お屋敷見取り図」大判ポスター上に記入するなどしながら発表し、探求の成果を分かち合う。</p> <p>1) 探求の結果が記された「お屋敷見取り図」大判ポスター、さらには個々のスケッチやメモ、デジタル写真といったデータを示しながら、居住者の方々を含む全員で、エグネと伝統的な暮らしにかかわる探求の成果を発表し合う。</p> <p>2) 活動全体の総括として、①散居景観を特徴づけるエグネは、さまざまな由来や機能を有する植物から構成され、ヒトや野鳥の行動が成り立ちに深くかかわっていること、②伝統的な暮らしとは、自給自足と資源循環を重んじる考え方に立って、エグネや用水を地域の自然と調和させながら利活用するエコロジカルな生活様式であることを確認し合う。その上で、エグネの存続や水資源の枯渇にかかわる課題を認識し、環境保全に向けて日常生活の中で関心と具体的な行動を保ち続ける必要性を自覚する。</p> <p>3) 学習活動を支援して下さった居住者・地元の方々にお礼を述べる。</p> <p>4) アンケートなどにより、活動全体を評価する。閉会。</p>	<p>ている実態、およびその思想が認識できるように支援する。</p> <p>・全体をとりまとめる活動を開始する前に、参加者の活動・記録状況を把握し、強引な進行にならないように心がける。</p> <p>・参加者の自由な発言を優先させる。</p> <p>・アンケートなどで評価を受ける際、回答者のプライバシー保護に十分留意する。</p>
------------------------------	---	--

● 事前準備が必要と考えられる物品(活動内容や実施時期によって異なる)

参加者: 長袖シャツ, 長ズボン, 厚底で滑りにくい靴, 帽子, タオル, ティッシュペーパー, リュックサック(両手を使って活動できる状態が望ましい), 飲料, 昼食, おやつ, 傘, 雨具, 防寒具, 筆記用具(複数色の色鉛筆またはマーカーペン, クレヨンを含む), 軍手, カメラ, 健康保険証のコピー, 傷害保険料や参加費

主催者: 参加者から寄せられた登録票(氏名・住所・年齢・緊急時の連絡先などが記載されているもの), 傷害保険にかかわる書類, ネームプレート, ワークシート, バインダー(クリップ付き画板), 携帯式蚊取り器と蚊取り線香, ライター, 防虫スプレー, 筆記用具(複数色の色鉛筆またはマーカーペン, クレヨンを含む), 解説パネル, 「お屋敷見取り図」大判ポスターと掲示用ボード, 画紙, セロファンテープ, 布粘着テープ, スプレー糊またはスティック糊, 解説用の補助資料, 各種生き物図鑑, 模造紙, 白紙や付箋(観察記録・メモ用), マジックインク(複数色), はさみ, 方位磁石, 巻き尺またはコンバックス(長さ2m程度の幹直径計測用, および30～50m程度の測量用), デジタルカメラ(交換用バッテリーと記憶媒体を含む), 双眼鏡, ルーベ, GPS, ビニル袋(各種サイズ; 一時的な採集品保管用, 雨天時ワークシート収納用, ゴミ収集用など), 竹を切断する専用のこぎり, 剪定ばさみ, カッター, サンドペーパー, 滑り止め付き軍手, 飲料水, 保冷・保温用ボックス(クーラーボックス), 冷却用の氷, おやつ, 食器・箸・コップ(昼食用), 雑巾, ふきん, タオル, 食器洗い洗剤・スポンジ, ティッシュペーパー, 救急薬品, 緊急車両, 携帯電話(緊急時の連絡など), 救急病院の情報

付表2. 体験型環境学習プログラム「地域遺産「エグネ」の未来を考え隊」.

学習の段階 経過時間	参加者の学習活動	進行役・支援者の留意点
a) 集合・アイス ブレイク	<p>1) 集合(見分森駐車場). 学習活動は、原則として「よそ者」と「地元民」から構成されるグループを単位として実施することから、氏名や居住地、所属、参加理由などをきちんと紹介し合う。</p> <p>2) グループごとに、人員、個々人の体調や服装、持ち物を確認し合い、支援者(参加者の活動を見守り、推進するスタッフ)と交流を深める。必要に応じて、傷害保険料金などを支払う。</p> <p>3) 安全で快適な活動となるよう、飲料、帽子、タオル、携帯式蚊取り器(防虫スプレーより効果大)の携行、相乗りする自動車・移動経路を念入りに確認する。</p>	<p>・参加者と目線をそろえる。</p> <p>・参加者に、ネームプレートやワークシートなどを配布しながら、身支度とトイレ使用の要否、配車、運転者、移動経路を確認する。</p> <p>・交流を深めながら、ひとり一人の活動への思いを把握する。</p> <p>・状況に応じて、緊張を解きほぐすためのパフォーマンスを加える。</p>
b) 導入の段階 0～ 15分	<p>1) 全員で、始まりのあいさつ。氏名や所属、参加理由などを紹介し合う。</p> <p>2) ワークシートで活動全体の流れを確認し、活動目的を鮮明にする。</p> <p>3) 安全確保(自動車で移動時の交通事故防止、服装や防虫対策など)、自然保護(採集や歩行時の踏みつけに対する注意など)、活動マナー(私有地や耕作地に対する配慮など)に関する留意点を確認する。</p>	
c) 探求の段階 15～300分	<p>1) 徒歩で見分森展望台に向かう途上、進行役や支援者への問いかけ、あるいはグループ内の「よそ者」と「地元民」の会話を通じて、グループとして実施する探求に対するイメージを膨らませ、活動意欲を高める。</p>	<p>・参加者の活動意欲が高まる会話を工夫する。</p> <p>・まずは、胆沢扇状地全体を見渡</p>

<p>d) まとめの段階 300～330分</p>	<p>2) 見分森展望台に登り、胆沢扇状地全体を俯瞰するアクティビティをワークシートを用いながら実施する。 「散居景観をのぞむ」: 扇状地を覆う散居景観を、土地利用状況や地形とともに眺望する。形状の異なるエグネの存在に気づき、それぞれ典型的なものを色鉛筆を用いてスケッチしながら、相互の違いや共通性を抽出する。全員で、探求の成果を分かち合う。さらに、三浦・五嶋(2002)が示した5タイプのエグネの形状(胆沢扇状地を「屋敷林の博物館」と形容する根拠)と、扇状地の段丘面(開拓の歴史的順序ともほぼ一致)に対応した分布パターンについて、解説パネルを用いた紹介を受け、次の活動の参考とする。</p> <p>3) 眺望した散居景観の中に入り込んで、エグネやキヅマ、段丘地形と土地利用、用水路、郷土料理といった伝統的な事象に触れる。 「屋敷林の博物館」胆沢扇状地をめぐる: 扇状地北部の低位段丘域に自動車で移動し、胆沢町の助成制度を利用してキヅマを保持しているお宅を見学する。必要に応じて、居住者の方から、キヅマの由来や機能、エグネとのかかわり、管理方法と将来の見通しなどについてお話をうかがう。 続いて、扇状地を南進しながら、段丘崖を越えるに従ってエグネの規模が大きくなり、畑地や牧草地が増加してゆく様子を認識する。産直センターで、地元の野菜や米を使った郷土料理を昼食として味わい、棚に並んだ農産品を見学・購入しながら農家の方々と交流する。</p> <p>4) A氏宅(もともと規模の大きいエグネを有するタイプのお屋敷)を訪ね、以下の2つのアクティビティを、ワークシートを用いながら実施する。 「エグネの内部を観察しよう」: 正面方向から、屋敷内の土地利用や家屋の配置・役割を概観した後、北西部を占めるエグネに赴いて、モウソウチク林、母屋に接する林縁に集中する山菜、祠とそれを囲むモミや照葉樹、土塁に沿って並ぶスギやサワラの大木、ひととき大きなブナやケヤキの巨木、森のように広いスギ植林などを巡る。その過程で、植物の生態的特徴(寿命、天然分布エリア、成長・繁殖様式など)や由来(自生か、植栽か)、用途などについて説明を聞き、多様な生き物がエグネに暮らしていることを知る。 「エグネのある暮らし」についてお話を聞こう(その2): 「お屋敷見取り図」大判ポスターも利用して、「エグネの内部を観察しよう」活動時の発見や疑問を出し合い、居住者の方々からエグネと伝統的な暮らし(食料や燃料、肥料などの自給自足と循環的な利用を重視した生活様式)のかかわり、エグネの管理方法と将来の見通しなどについて、お話をうかがう。</p> <p>1) 休憩をとりながら、グループごとに、エグネやキヅマ、散居村景観の魅力や将来像、改善点についてとりまとめ、探求活動全体をふり返る。 2) 居住者の方々を含む全員で、とりまとめた結果を発表し合い、意見を交換する。 「エグネの未来を考えるディスカッション」: ①「地域遺産」とみなしうるエグネやキヅマ、散居村景観の魅力、②それを維持・継承してゆくことの難しさ、③問題を解決し、保全・活用を進めてゆくためのアイデアなどについて、「よそ者」と「地元民(居住者を含む)」、場合によっては所属・職業に応じた立場から発言する。 意見交換で出された発言を総括する。「よそ者」と「地元民」がそれぞれの想いを認め合った上で、日常生活の中でエグネに対する関心と具体的行動を保ち続ける必要性を自覚する。</p> <p>3) 学習活動を支援して下さった居住者・地元の方々にお礼を述べる。 4) アンケートなどにより、活動全体を評価する。閉会。集合場所に戻って解散。</p>	<p>すスケールで観察し、土地利用の実態、多様なエグネの存在と地形(開拓史)に応じた分布パターン、エグネと家屋の位置関係や樹種の普遍性などが認識できるよう、問いかけを工夫する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートや器具類の使い方について、個々のアクティビティごとに丁寧に指導する。 ・移動時に複数の自動車を利用する場合は、台数を最小限に抑えつつ、支援者が一人以上乗り込んで、運転や学習の支援にあたる。 ・活動範囲に留意し、安全確保やマナー遵守に心がける。適宜休憩(水分補給の機会)を設ける。 ・五感を多用した活動とする。 ・動植物の形態や生態、資源循環型の暮らしの実態にも目が向くような問いかけを配置する。 ・個々の探求活動が記録として残るように、個性を尊重しながら、ワークシートの利用を促す。 ・発言が出ない場合は、支援者が参加者の積極性を引き出すような支援を行う。 ・探求活動全体を視野に入れ、グループとしてとりまとめがなされるように支援する。 ・進行役は、参加者の自由な発言を尊重しながらも、話題が発散し過ぎないように留意する。 ・アンケートなどで評価を受ける際、回答者のプライバシー保護に十分留意する。
-------------------------------	--	--

● 事前準備が必要と考えられる物品(活動内容や実施時期によって異なる)

「エグネとエコな暮らし探検隊」(付表1)で示した物品に同じ。さらに、参加者と主催者が相乗りして移動する自動車を準備する必要がある(主催者が、交通事情に詳しい運転者と自動車を事前に確保しておくことが望ましい)。